

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653299

研究課題名(和文)アクションリサーチを用いた音楽科教師の専門性の探究

研究課題名(英文)An Exploration of Music Teacher's Expertise using Action Research

研究代表者

三村 真弓(MIMURA, Mayumi)

広島大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：00372764

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：研究全体の成果としては、以下が挙げられる。教科教育・教科専門・教職の視点を取り入れたアクションリサーチによって、音楽科教師の技術的実践力と反省的実践力を育成することができた。音楽科教師として必要とされる専門性とは、教材解釈力・教材構成力、授業構成力・学習指導案作成能力、授業運営力・評価力・指導力、生徒指導力、美的価値判断力・音楽表現力等であることがわかった。それらの専門性を育成するのに必要な音楽科教員養成の授業科目が明らかとなった。これらによって、音楽科教員養成における教科構成原理を示すことができ、音楽科教員養成モデル・コア・カリキュラム案を提案することができた。

研究成果の概要(英文)：The whole results of this research are as follows: 1. we cultivated music teacher's skills of technical practice and reflective practice by using the action research that applies the viewpoints of subject pedagogy, music experts, and teaching profession. 2. we clarified that the following items are the main skills required for music teacher experts; interpretation and construction of teaching material, lesson structure and teaching plan design, lesson management and evaluation, leadership in lessons, student guidance, aesthetic value judgment, and musical expression. 3. we demonstrated the subjects of music teacher training which were needed to develop the music teacher's expertise. 4. Based on the above results, we suggested a constitutive principle of subject in music teacher training and offered a core-curriculum design of music teacher training model.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：音楽科教師 専門性 アクションリサーチ 教科構成原理 モデル・コア・カリキュラム 教科教育・教科専門・教職の視点

1. 研究開始当初の背景

昨今、高度な教員養成をめざして、教職大学院の設置等が行われつつある。すなわち、従来の研究中心の大学院プログラムへの反定立的主張として、理論と実践の統合への期待が高まっている。しかしながら、そのプログラムの内容を精査すると、特に大学院2年次において、教科教育に関する科目以上に、学級経営や生徒指導など学校運営に関する科目が重視されている傾向にある。また学部の教員養成課程においても、教育実習関連の科目が増え、反対に教科教育の授業や教科内容に関わる授業が削減される状況にある。つまり、教科の教育そのものの学的訓練の不足が懸念される現状なのである。即戦力となるような実践力の獲得をめざし、実習科目の充実が図られることは望ましいことである。しかし、「教科としての専門性とは何か」「教科の専門性を向上させるには何が必要なのか」が明示されないまま、いたずらに実習科目のみが充実されても、果たして効果があがるのだろうか。教科教育学としての使命は、上記の命題を明らかにすることにあると考える。

2. 研究の目的

本研究は、理論と結びついたアクションリサーチを用いて、音楽科授業の分析と、音楽科教師の技術的実践力と反省的実践力の評価を行い、音楽科教師として必要とされる専門性とは何かを明らかにすることを第1の目的とする。さらに、専門性を育成するためには、音楽科教員養成課程において何をすべきかを解明し、高度な音楽科教員養成課程のプログラム構成と内容について提案することを第2の目的とする。

3. 研究の方法

平成23年度は、まずアクションリサーチの手法について、研究組織の全員で検討した。それをもとに、研究代表者が所属する大学の教育実習機関において、学部教育実習生の合唱の授業を録画し、それを研究者・大学院生が分析した。さらに、教育実習生にも、録画された自身の授業を分析させた。分析の視点は、授業者の行動のもととなっている知識・技能は何か、それらは教員養成課程のどの授業で習得されたものか、授業者の行動の課題は何か、それらは何が足りていないからなのか、等である。

平成24年度は、教職実践演習に関する研究と、教育実習生のアクションリサーチによる研究の2方面から、音楽科教師の専門性を探究した。

教職実践演習に関する研究として、日本教育大学協会全国音楽部門大学部会に加盟する大学52校に質問紙調査を実施し、47校から回答を得た。質問紙調査の内容は、各大学の音楽科教員養成課程の基本情報、教員養成スタンダード、履修カルテ、教職実践演習の内容等についてであった。

アクションリサーチによる研究として、音楽科のすべての教育実習生に、各自の授業実践を2つずつ録画させた。教育実習終了直後、学生に、教育実習映像の自己評価と、音楽科授業実践に関わる知識・技能・指導力に関する自己評価を行わせた。

以上の研究から、音楽科教師の専門性を向上させるためには、教員養成課程において、教科教育・教科専門・教職を架橋する必要性があることが明らかとなった。そこで、平成25年度は、教科教育・教科専門・教職の視点を取り入れたアクションリサーチによって、音楽科教師の専門性を追究することとした。

4. 研究成果

平成23年度の研究の分析結果は以下である。学部教育実習生の授業映像を分析した結果、学習指導案の書き方、授業の進め方等の教科教育に関する内容は、ほぼ習得できていることがわかった。しかし、歌唱指導の方法、歌唱表現の工夫の仕方、伴奏の弾き方等の教科専門に関する内容は、教育実習ではそれほど活かされていなかった。研究者・大学院生が客観的に分析すると、音楽科教員養成課程における合唱の授業、指揮法の授業、声楽の授業で教えられているはずの内容に関する課題が多かったが、授業者自身には、大学におけるそれらの教科専門に関わる授業と、自身の授業の課題との関連性が明確には意識されていなかった。以上の研究の成果として、教育実習の授業を自己分析することによって、学部教育実習生の実践力の向上が期待されること、大学院生の授業観察力・洞察力の向上が見られたこと、が挙げられる。

平成24年度に行った教職実践演習に関する研究の成果は以下である。教員養成スタンダードの特徴として、全評価項目のうち、音楽科の内容に関わるものが少ないこと、評価項目のうち、客観的に評価できないものが多い数の存在することが明らかとなった。また履修カルテの特徴として、履修状況の記録と自己評価シートの組合せが多いこと、自己評価のみがほとんどで、教員のコメントはあったりするものの、教員からの評価を取り入れている大学は非常に少ないことがわかった。教職実践演習の特徴としては、教えることが難しい資質能力の修得をめざすために、さまざまな授業方法が考えられていること、15回の教職実践演習の授業のうち、音楽科の内容に関わるものが少ないことがわかった。

アクションリサーチによる研究の内容は以下である。教育実習生に実習中に録画した自身の授業映像を自己評価させた結果、音楽科教師に必要とされる知識・能力が明らかとなった。それらは、教材解釈力・教材構成力、授業構成力・学習指導案作成能力、授業運営力・評価力・指導力、一般的な教授スキル、美的価値判断力・音楽表現力等である。また、それらの知識・能力に関連する音楽科教員養成の授業科目も明らかとなった。

これをもとに、音楽科教員養成における教科構成原理を示したものが図1である。音楽実技科目や音楽理論科目で学んだことは、音楽科授業に直接結びつかないことが多い。したがって、領域をまたがって音楽科授業へと繋ぐ、つまり架橋する必要がある。また、音楽科独自の特徴は、図左上の「美的価値判断力・音楽表現力」である。これらは、主として専門教育によって育成される。したがって、音楽科教員養成モデル・コア・カリキュラムは、「専門教育科目」「教科内容科目・教科教育科目・架橋科目」「教職専門科目」「教育実習関係」の4本の柱から成り立つと考える(表1)。

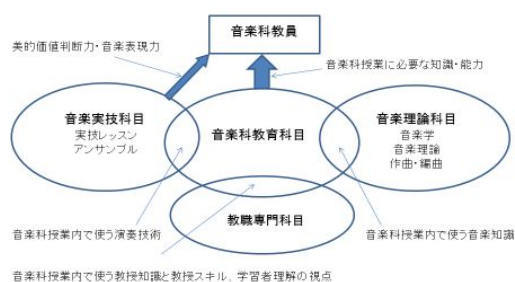


図1 音楽科教員養成における教科構成原理

表1 音楽科教員養成モデル・コア・カリキュラム試案

1年次	2年次	3年次	4年次
専門教育科目			
専門実技			
アンサンブル			
教科内容科目・教科教育科目・架橋科目			
基礎実技			
(ピアノ, 声楽, 指揮, 伝統音楽等)			
音楽理論			
(音楽史, 楽典, 作曲・編曲等)			
音楽科教育			
音楽科教育実践演習・教職実践演習			
教職専門科目			
教育学・教育心理学			
教育実習関係			
教育実習入門	観察実習	教育実習	

音楽科教員にとっては音楽の専門性の獲得が必須であることから、1年次から教科教育と教科専門を架橋することが望ましいとは考えない。専門実技科目は1年次から独立して4年次まで系統的に行うべきであり、それによって音楽の専門性が獲得されるのである。音楽の専門性なくして音楽科教員養成はできない。また、教科教育と教科専門は、それぞれの内容が獲得されたうえで、教育実習に向けてあるいは教員採用試験に向けて架橋するべきであるという結論に達した。

平成25年度に行った、教科教育・教科専

門・教職の視点を取り入れたアクションリサーチによる研究の内容は以下である。中等音楽科教育関連の授業や教職実践演習において、教科教育・教科専門・教職の三者の視点から、模擬授業や教育実習映像を分析し、グループ討議によって、共通の課題及び個人の課題を明らかにした。これらの課題に基づいて学習指導案を作成し、模擬授業を行い、さらにそれを分析・討議した。各授業においては、教科教育と教科専門の教員が協働で指導助言に当たった。教科教育の視点や教職の視点を入れて学習指導案を作成し、模擬授業を行う場合、当初学生は表面的な指導の工夫に偏ってしまい、芸術教育としての本質を見失いがちになるという課題が見られた。しかし、教科専門の教員の指摘を受けて次第に改善していき、最後には、教科教育・教科専門・教職の視点からみて、非常にバランスがとれた授業を行うことができるようになった。

これらのことから、中等音楽科教員養成課程において、音楽科教員としての専門性を学生に獲得させるには、長年の専門教育で培われてきた指導のスタイルや教師像をいったん崩す。新たに教科教育の視点を入れて音楽科授業を再考する。教職の視点を入れて生徒指導に配慮した音楽科授業改善を行う。教科専門の視点を入れて芸術教育としての音楽教育の真髄を捉え直す。教科教育・教科専門・教職の視点をバランスよく取り入れた音楽科授業を構築する、といった手順が効果的であることがわかった。

研究全体の成果としては、次のようなことが明らかとなった。音楽科教師の専門性には、専門教育で培われた美的価値判断力や音楽表現力等がベースとして必須である。音楽科教育の視点だけでなく教職の視点も重要である。教科教育・教科専門・教職の三者の視点が音楽科教師のなかでバランス良く融合することによって、専門性が向上する。質の高い音楽科教員養成をめざすためには、教科専門の教員が教科教育や教職の視点をもって専門教育を行う必要があること、教科教育の教員は教職の視点を取り入れるだけでなく、芸術教育としての音楽科教育という視点をも常に意識する必要があること、である。そのためには、教科教育の教員と教科専門の教員が協働で三者の視点を架橋するような授業が必須である。

今後の展望として、現職教員の専門性の向上には何が有効なのかを明らかにすることが重要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

1. 三村真弓, 山内規嗣, 大後戸一樹, 中村知世, 網本貴一, 木下博義, 佐藤大志, 間瀬茂夫, 枝川一也, 森田愛子, 各教科(校種別)

の授業研究を通じた教職・教科教育・教科内容の連携・教員協働の在り方に関する研究(2), 広島大学大学院教育学研究科 共同研究プロジェクト報告書, 第 12 巻, 査読無, 2014, pp.107-122

2. 吉田成章, 榎藤敦子, 草原和博, 間瀬茂夫, 柳瀬陽介, 岩田昌太郎, 三村真弓, 丸山恭司, 曾余田浩史, 森下真実, 中坪史典, 森田愛子, 教職能力を高める事例研究のあり方, 広島大学大学院教育学研究科 共同研究プロジェクト報告書, 第 12 巻, 査読無, 2014, pp.265-280

3. 三村真弓, 伊藤真, 中等音楽科教員養成の授業科目における事例の意義と課題, 平成 25 年度広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト最終報告書, 2014, pp.32-42

4. 三村真弓, 「音楽科教育実践演習」をとおした教科内容学と教科教育学の架橋, 日本教育大学協会全国音楽部門大学協会, 第 38 号, 査読無, 2013, pp.32-33

5. 三村真弓, 音楽科教員養成における教職と教科を架橋する構成原理を求めて, 日本教科教育学会誌, 第 35 巻第 4 号, 査読無, 2013, pp.71-76

6. 三村真弓, 山内規嗣, 大後戸一樹, 中村知世, 網本貴一, 木下博義, 佐藤大志, 間瀬茂夫, 枝川一也, 森田愛子, 各教科(校種別)の授業研究を通じた教職・教科教育・教科内容の連携・教員協働の在り方に関する研究, 広島大学大学院教育学研究科 共同研究プロジェクト報告書, 第 11 巻, 査読無, 2013, pp.265-280

7. 深沢清治, 吉田裕久, 草原和博, 小山正孝, 磯崎哲夫, 岩田昌太郎, 鈴木明子, 三村真弓, 三根和浪, 長松正康, 教員モデル・コア・カリキュラム作成のための教科構成原理の探求(第 2 年次), 広島大学大学院教育学研究科 共同研究プロジェクト報告書, 第 11 巻, 査読無, 2013, pp.69-82

8. 深沢清治, 吉田裕久, 草原和博, 小山正孝, 磯崎哲夫, 三村真弓, 三根和浪, 岩田昌太郎, 鈴木明子, 教員養成モデル・コア・カリキュラム作成のための教科構成原理の探求, 広島大学大学院教育学研究科 共同研究プロジェクト報告書, 第 10 巻, 査読無, 2012, pp.155-167

〔学会発表〕(計 5 件)

1. 三村真弓, 中等音楽科教員養成における教科教育と教科専門と教職の架橋の試み - 教職実践演習における実践をとおして -, 平成 25 年度日本音楽教育学会中国四国地区例会, 2014.3.15, 鳴門教育大学

2. 三村真弓, 音楽科教育実践演習をとおした教科内容学と教科教育学の架橋, 平成 25 年度日本教育大学協会全国音楽部門大学部会第 38 回全国大会, 2013.5.18, ホテルかめ福

3. 三村真弓, 教職実践演習実施に向けて, 平成 25 年度日本教育大学協会全国音楽部門大学部会第 38 回全国大会, 2013.5.18, ホテル

かめ福

4. 三村真弓, 教科教員養成のためのコア・カリキュラムの構想(2) - 音楽科教員養成における教職と教科を架橋する構成原理を求めて -, 日本教科教育学会第 38 回全国大会, 2012.11.3, 東京学芸大学

5. 三村真弓, 教職実践演習に関する質問紙調査の結果報告, 日本教育大学協会全国音楽部門大学部会, 第 37 回全国大会, 2012.5.26, ビエント高崎

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三村 真弓(MIMURA MAYUMI)
広島大学大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 00372764

(2) 研究分担者

吉富 巧修(YOSHITOMI KATSUNOBU)
広島大学大学院教育学研究科・名誉教授
研究者番号: 20083389

緒方 満(OGATA MITSURU)
比治山大学現代文化学部・教授
研究者番号: 20512297

河邊 昭子(KAWABE AKIKO)
兵庫教育大学学校教育研究科・准教授
研究者番号: 80584862

伊藤 真(ITO SHIN)
広島大学大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 70455046